



Title	1906年総選挙における自由党の選挙基盤：1人区の得票分析
Author(s)	岡田, 新
Citation	大阪大学英米研究. 2008, 32, p. 13-36
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/99320">https://hdl.handle.net/11094/99320</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 1906年総選挙における自由党の選挙基盤

## － 1 人区の得票分析－

岡 田 新

### I はじめに

自由党は1906年総選挙で歴史的な大勝利を収めた。保守陣営はそれまで享受してきた多数の無投票当選者を失い、1人区では自由党との一騎打ちで惨敗、2人区でも自由党と労働党の選挙協力によって議席から叩き落された。一方労働党は自由党の大勝利の陰で、自由党と密接に協力しつつ議席を伸ばし、時に自由党を押しつけて議席を手にする力を見せ始めていた。本稿では、前稿における2人区の分析を踏まえながら、さらに1人区での戦況へと分析の歩を進めることにしたい<sup>(1)</sup>。

1900年選挙と1906年選挙における517の1人区における政党の対決のパターンは、表1に掲出したとおりである。表から明らかなように、1900年に160を数えた無投票選挙区は、1906年にはわずか11に激減し、ほとんどの選挙区で実際に選挙戦が闘われた。双方の選挙とも、実際に投票が行われた選挙区の圧倒的な多数で、保守党ないし自由統一党と自由党候補が一对一对峙した。従来保守党が享受してきた無投票当選がなくなったことを別とすれば、こうした選挙区における二大政党の直接対決が選挙戦の主戦場であったことは言うまでもない。

しかし1900年選挙と比べて1906年選挙での政党の対決の様相には、重要な変化が起きていた。表1が示すように、1900年選挙では、160の無投票選挙

1906年総選挙における自由党の選挙基盤

区を除く357選挙区のうち96%を占める341選挙区で、自由党と保守党（ないし自由統一党）の一騎打ちとなった。一方1906年選挙では、1900年に自由党対保守党の一騎打ちであった選挙区のうち、7選挙区が保守党対労働党の対決に変わり、10選挙区が自由・保守・労働の三つ巴戦となり、その他の対決パターンの選挙区も大幅に増加した。この結果、1906年選挙では、実際に選挙が行われた487選挙区のうちで、自由党と保守党の一騎打ちが占める比率は86%（418選挙区）に低下した。つまり1906年選挙では、自由党と保守党の一騎打ち以外の形の選挙戦が、実際に選挙が闘われた選挙区のうち14%を占めるようになり、無視できない比重となっていたのである。特に保守党と労働党との対決は、5選挙区（1900年）から19選挙区（1906年）へ4倍近く

表1 1900年選挙と1906年選挙における1人区の政党の対決パターン

1906年								
1900年	対決パターン	自由党・保守党	保守党・労働党	自由党・労働党	自由党・保守党・労働党	その他	無投票	計
	自由党・保守党	281	7		10	24	19	341
	保守党・労働党	1	2		1	1		5
	自由党・保守党・労働党	1	1			1		3
	その他	4			1	3		8
	無投票	131	9	1	3	5	11	160
	計	418	19	1	15	34	30	517

注 記

- (1) F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。
- (2) 対象はイングランド、ウェールズ、スコットランドの1人区。
- (3) 「保守党」には、保守党と自由統一党をまとめて掲出している。「自由党」には、自由党の労働者候補（Lib/Lab）を含む。
- (4) 「その他」は、社会民主連盟など他の政党の候補が立候補した場合を示す。

増え、自由党・保守党・労働党の三つ巴の選挙区も、3選挙区（1900年）から15選挙区（1906年）へ5倍も増えた。

自由党と保守党の一騎打ちという伝統的な図式からはずれたこうした選挙区が数多く出現したことは、労働党の登場によって、グラッドストーンとディズレイリが自由党と保守党を代表して舌戦を繰り広げたヴィクトリア時代中ごろの選挙戦の範型に変化がおきつつあったことを物語っている。同時に、こうした新たな類型の選挙区の選挙結果は、伝統的な自由党と保守党の対決パターンからの変化が起きた場合、それぞれの政党の支持層がどのように動いたかを示す興味深いデータを提供している。

そこで本稿では、まず双方の選挙で自由党と保守党が一騎打ちで戦った選挙区（281選挙区）での戦況を分析し、次にこうした伝統的な図式からはずれた選挙区での選挙戦における得票の動きを分析の俎上にのせることとしたい。

## Ⅱ 一騎打ちの勝敗

### （1）一騎打ち選挙区の概況

すでに指摘したように、1900年選挙では相当な数の無投票当選があったが、1906年選挙では、無投票当選が激減するとともに、保守党と自由党の一騎打ち以外の対決の構図も増加した。とはいえ、1900年選挙と1906年選挙双方ともに、自由党と保守党ないし自由統一党との一騎打ちで争われた選挙区は、依然281にのぼり、1906年選挙で実際に選挙が戦われた487選挙区のうちの半ば以上を占めていた。2つの選挙で自由党と保守陣営が続けて対決したこうした選挙区が、選挙戦の核をなしていた。

選挙区ごとに社会的な統計が整備されていれば、そうしたデータをもとに投票行動を掘り下げて研究することができる。しかし20世紀初頭の選挙について、こうしたデータを使うことはできない。そこでここでは、各選挙区の特徴を定性的に推論したヘンリー・ペリング（Henry Pelling）の研究を参照

1906年総選挙における自由党の選挙基盤

しつつ、この2つの選挙で連続して保守勢力と自由党の一騎打ちとなった選挙区の情勢を分析してゆくことにしたい。

まず双方の選挙で保守・自由の一騎打ちであった281の選挙区における自由党の得票率の変動を地域別に整理してみよう。表2はこの二つの総選挙における自由党の議席と得票率の変動を地域別に計出したものである。

表2 1900年選挙と1906年選挙双方で自由・保守陣営の一騎打ちだった一人区における自由党議席と得票率の地域別の変動

地 域	該当 選挙 区数	1900年		1906年		増 減	
		自由党 議 席	自由党 得票率(%)	自由党 議 席	自由党 得票率(%)	自由党 議 席	自由党 得票率(%)
London	37	8	42.1	30	55.3	22	13.2
South-East	18	3	40.9	14	53.3	11	12.4
East Anglia	14	7	48.5	14	56.0	7	7.5
Central	14	5	48.4	14	56.0	9	7.6
Wessex	8	0	44.4	6	51.3	6	6.9
Bristol	11	6	49.8	10	59.0	4	9.2
Devon&Cornwall	9	5	49.9	9	55.5	4	5.6
West Midland	14	5	47.2	13	54.3	8	7.1
East Midland	20	10	48.8	18	56.4	8	7.6
Peak-Don	7	4	49.9	6	57.9	2	8.0
Lancastria	31	8	46.0	29	57.2	21	11.2
Yorkshire	18	11	48.8	16	58.1	5	9.3
North England	15	9	51.5	15	63.1	6	11.6
Wales	13	9	52.9	13	60.2	4	7.3
Scotland	52	24	51.2	48	61.3	24	10.1
	281	114	47.7	255	57.5	141	9.8

注 記

- (1) F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。
- (2) 対象はイングランド、ウェールズ、スコットランドの1人区で1900年総選挙と1906年総選挙の双方において、自由党と保守党ないし自由統一党との一騎打ちだった選挙区。
- (3) 地域分類は、Henry Pelling, *Social Geography of British Elections 1885-1910* (London, 1967) に準じる。

この表から、連続して一騎打ちとなった選挙区で、1906年選挙で自由党が全ての地域で議席を増やしていることが分かる。自由党はこのカテゴリーに属する281の選挙区のうち、1900年選挙では141選挙区、およそ6割の選挙区でしか議席がとれなかった。これに対して、1906年選挙では281のうち255選挙区、およそ9割の選挙区で勝利をもぎとって圧勝した。中でもロンドン(22議席増)、イングランド南東部(11議席増)ランカストリア(21議席増)、スコットランド(24議席増)で議席が増え、自由党の勝利に重要な貢献をした。この4地域だけで自由党は78議席を増やしており、これは全議席増のほぼ半分にあたる。

得票率の上でも、自由党は全地域で得票率を増やし、平均で9.8%も得票率を上昇させた。1900年選挙では、平均50%以上を獲得した地域は、イングランド北部とウェールズ、スコットランドしかなかった。これに対して1906年選挙では、すべての地域で、平均50%を超す得票を獲得した。もともと自由党が強いイングランド北部、ウェールズ、スコットランドでは自由党の平均得票率は60%を超えた。一方得票率の上昇が著しかったのは、ロンドン(13.2%増)、イングランド南東部(12.4%増)、ランカストリア(11.2%増)などの地域であった<sup>(2)</sup>。

## (2) 自由党得票率の分布

ではどのような選挙区で自由党の得票率はどのような変化をみせ、議席につながったのだろうか。自由党の得票率の分布をさらに細かくみてみよう。図1と図2は、1900年選挙と1906年選挙の選挙区における自由党得票率の分布を示したグラフである。このグラフから、1906年選挙では、1900年選挙に比べて自由党の得票率が全体として上昇しただけではなく、その得票率の分布の形状が大きく変化していることが分かる。1900年選挙における自由党得票率の分布は、左側に長く裾を引いていた。右側の裾は、60%近辺で切り落とされたような形状を示している。これに対して、1906年選挙での自由党の

1906年総選挙における自由党の選挙基盤

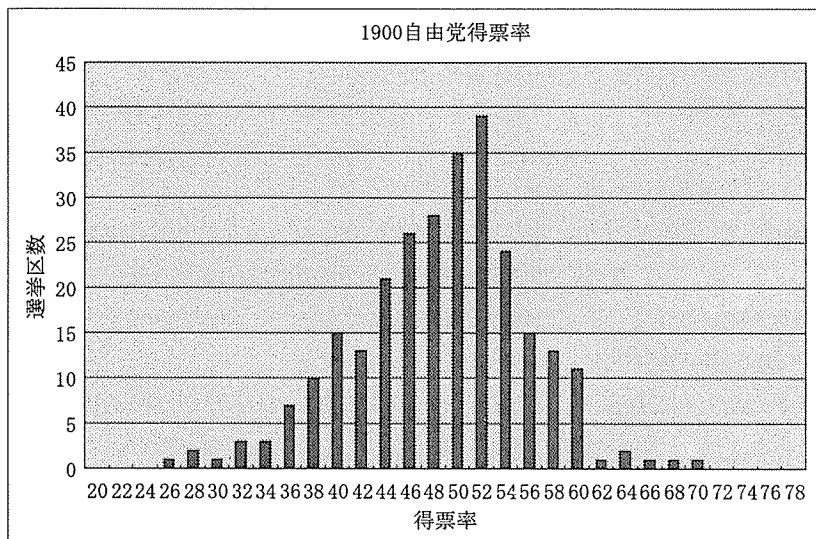


図 1

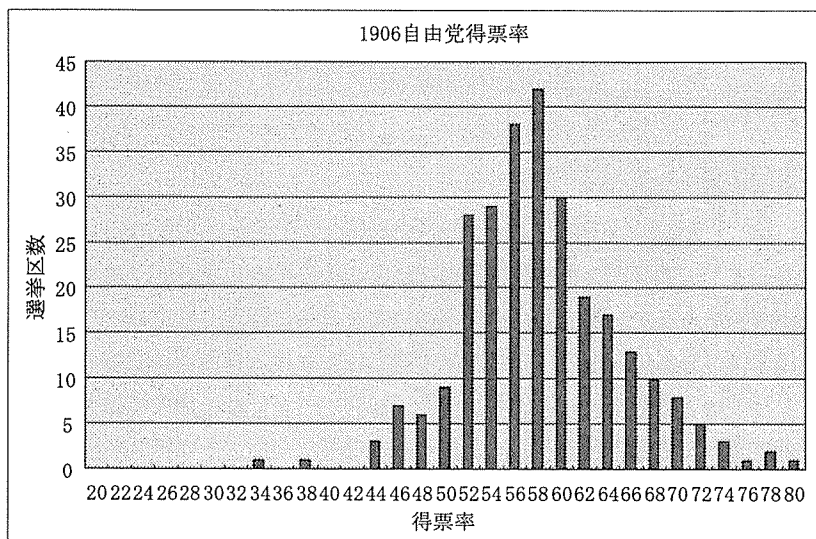


図 2

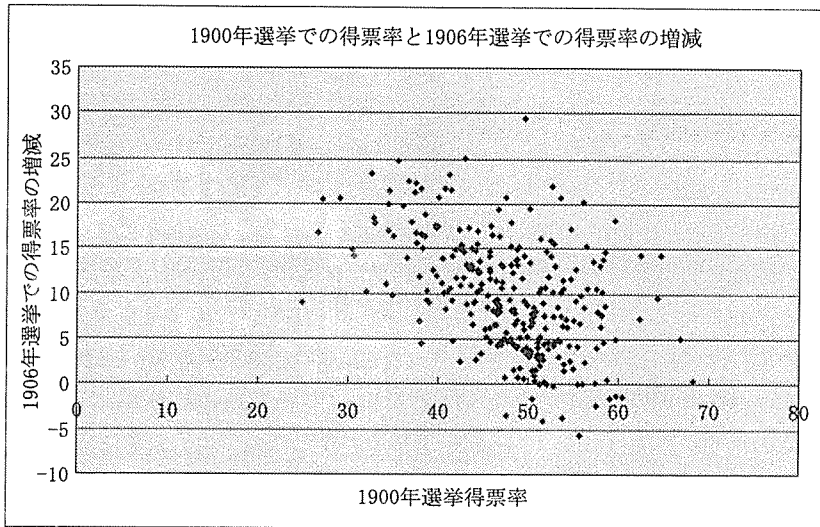


図 3

図 1, 2, 3 注記

- (1) F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。
- (2) 対象はイングランド、ウェールズ、スコットランドの 1 人区で 1900 年総選挙と 1906 年総選挙の双方において、自由党と保守党ないし自由統一党との一騎打ちだった選挙区。

得票率の分布は、全く反対に、右側に長く裾が伸び、左側の裾は 50% 以下が突然切り落とされたような形になっている。つまり 1900 年選挙と 1906 年選挙を比較すると、自由党の得票率の分布は、全体として得票率が上昇して右にシフトしただけではなく、得票率の分布が、1900 年選挙の形を裏返したミラーイメージのような形になっていたのである。

このことは、1906 年選挙で得票率の増加が、一律に起こったのではないことを示唆している。このことは、まず 1906 年選挙においては、1900 年選挙で低い得票率に甘んじていた選挙区で、相対的により大きな得票率の上昇が起こり、その結果、こうした選挙区で自由党が 50% を制して勝った、ということ推測させる。



図3は、1900年選挙での自由党の得票率と1906年選挙での得票率の増加を散布図に描いたものである。このグラフには、1900年選挙で、50%を大きく下回り30%、40%台にとどまっていた選挙区で、得票率の増加が著しいことが明確に示されている。散布図からは、1900年に低い得票率であった選挙区で、1906年には得票率が大きく増加し、結果として議席を獲得できるような水準に到達していた事例が多かったことが読み取れる。こうした選挙区こそ、自由党の地滑り的な勝利をもたらした象徴的な選挙区であったと考えることができる。

では、それはどのような選挙区であったか？1900年と1906年の双方の選挙で自由党と保守陣営が一騎打ちとなった選挙区における、1900年選挙における自由党の平均得票率は47.7%、1906年選挙での自由党の平均得票率は57.5%であり、自由党の平均的な得票率の上昇は9.8%であった。したがって1900年選挙で自由党の得票率が40%を切っていた選挙区では、平均得票率9.8%より一層大きな得票率の上昇がなければ、新たに議席を獲得することはできなかった。表3は、得票率の大幅な上昇で新たに議席をつかんだこうした選挙区の選挙結果を抽出したものである。

表3に掲出された選挙区には、労働者の多い選挙区が多数含まれている。まず最も得票率が上昇した選挙区は、ランベス・ケニントンであった。ロンドンのブリクストンの南に位置するこの選挙区を、ヘンリー・ペリングは、中産階級と労働者階級が混在する選挙区として分類しているが、鉄道労働者と製陶労働者が多く住み、労働者の議員は当選確実だといわれていた<sup>(3)</sup>。ここでは、1900年には保守党のクック（Cook）と自由党のエセックス（Essex）が争い、保守党クックが64.5%をとり、自由党エセックスの得票率は35.5%に過ぎなかった。ところが1906年に自由党から立ったS. コリンズ（S. Collins）は、24.8%も自由党の得票率を伸ばし、60.3%をとって議席を奪った。以後1910年の2度の選挙でも、自由党のコリンズが議席を守り抜いている。

2番目に得票率が著しく上昇した選挙区は、セント・パンクラス西であった。シティの北西にあたるこのロンドンの選挙区は、貧しいキャムデンタウ

表 3 1900年選挙での自由党得票率が40%未満で、  
1906年選挙で議席を獲得した選挙区

	選 挙 区 名	1900年	1906年	得票率の差
1	Lambeth, Kennington	35.5%	60.3%	24.8%
2	St.Pancras, West	32.5%	55.9%	23.4%
3	Manchester, East	36.6%	59.1%	22.5%
4	Southwalk, Rotherhithe	37.4%	59.8%	22.4%
5	Sutherland	38.1%	59.7%	21.6%
6	Middlesex, Enfield	34.6%	56.1%	21.5%
7	Middlesex, Tottenham	37.4%	58.7%	21.3%
8	Islington, North	34.5%	54.5%	20.0%
9	Whitchaven	36.1%	55.8%	19.7%
10	West Ham, North	38.5%	57.3%	18.8%
11	Hackney North	32.7%	51.2%	18.5%
12	Buckinghamshire, Wycombe	37.0%	54.9%	17.9%
13	St.Pancras, South	32.9%	50.7%	17.8%
14	Lancashire, Stretford	39.6%	57.3%	17.7%
15	Leeds, North	39.9%	57.4%	17.5%
16	Suffolk, Lowestoft	39.7%	57.0%	17.3%
17	Tower Hamlets, Mile End	34.4%	51.4%	17%
18	Hackney Central	37.4%	54.2%	16.8%
19	Islington, East	38.1%	54.7%	16.6%
20	Kent, Tunbridge	38.5%	54.9%	16.4%
21	Liverpool, Exchange	35.0%	51.4%	16.4%
22	Huntingdonshire, Ramsey	37.6%	53.2%	15.6%
23	Surrey, Guildford	38.3%	53.3%	15%
24	Fulham	39.4%	52.0%	12.6%
25	Lincolnshire, Sleaford	39.7%	51.7%	12.0%
26	Surrey, Chertsey	36.5%	50.4%	13.9%

注 記

- (1) F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。  
(2) 網掛けは、議席を獲得した事を示す。

ン周辺地域とリージェントパークの東側の中産階級の居住地域を含んでおり、ペリングによって、やはり中産階級と労働者との混住選挙区に分類されている<sup>(4)</sup>。1900年には、保守党のグラハム（H. R. Graham）が67.5%を集めて議席を制し、自由党のベンソン（G. R. Benson）は32.5%に過ぎなかった。ところが1906年には自由党のコリンズ（W. J. Collins）が、55.9%と23.4%も得票率を伸ばして議席を奪い取った。1910年1月にも自由党コリンズは僅差で議席を守りきったが、10月には僅差で保守党に競り負けた。

第3位はマンチェスター東選挙区である。繊維産業の首都マンチェスターの東に位置するこの選挙区は、工場がひしめく労働者街であった<sup>(5)</sup>。この選挙区は、1885年から1906年まで、ソールズベリーの後をついで保守党政権を率いてきたバルファオ前首相の議席であった。バルファオは1885年から、選挙のたびに52－55%の得票を集めて議席を確保してきた。1900年選挙では実に63.4%もの得票率を記録した。しかし1906年には、バルファオは40.9%しかとれず、自由党のホリッジ（T. G. Horridge）が59.1%の票を集めて当選。さらに1910年には、自由党にかわって立候補した労働党サットン（J. E. Sutton）の議席となる。

4位のサウス・ウオーク・ロザハイズも、ロンドンの労働者地区に位置していた。シティの対岸に位置するこの選挙区は、テムズ川で働く水夫などが住む地域で、港町の雰囲気をもっていた<sup>(6)</sup>。1900年には保守党のマクドナ（J. C. MacDona）が得票率62.6%を得て当選したのに対して、自由党のハート・デイビス（T. Hart-Davies）は37.4%にとどまっていた。ところが1906年には保守党のマクドナは40.2%しかとれず、自由党のカーゴム（H. W. C. Carr-Gomm）が59.8%の得票をとって議席を奪い、以後1910年の選挙でも、自由党が議席を維持した。

6位のミドルセックス、エンフィールドと7位のトッテナム、8位のイシュリトン北、10位のウエストハム北も、いずれもロンドンやロンドン郊外の選挙区で労働者の少なくない選挙区であった。ミドルセックス、エンフィールドは、ロンドンのすぐ外側に位置し、労働者が多く住む地域であったが、軍

の銃を製造している工場に勤務する労働者がかなりの比重を占めていたことから、保守が比較的強い選挙区であった<sup>(7)</sup>。事実この選挙区では1885年以来一貫して保守党が議席を占めてきた。1895年には保守党のボウルズ (H. F. Bowles) が無投票で当選し、1900年選挙でも保守党のボウルズが65.4%もの得票を集め、自由党のクロール (C. S. Crole) を寄せ付けなかった。ところが1906年選挙では自由党のブランチ (J. Branch) が56.1%を集めて第三次選挙改正以後始めて自由党に議席をもたらした。1910年の2回の選挙では、再び保守党のニューマン (J. R. P. Newman) が議席をとりもどしたが、その得票率は52.6%と52.1%にとどまり、かつての勢いはもはやみられなかった。

トッテナムも、ロンドンのすぐ北にあり、グレートイースタン鉄道でロンドンに通う多数の労働者が住んでいたが、古くからのフリーホルダーとして選挙権をもっていた有権者も少なくなく、1885年からずっと保守党の議席であった<sup>(8)</sup>。1900年選挙でも、保守党のハワード (J. Howard) が62.6%をとっていた。ところが1906年選挙では、自由党のオールデン (P. Alden) が58.7%を集めて議席をもぎ取り、1910年選挙でも51.1%、52.4%で保守党に競り勝った。

9位のホホワイトヘイブンは、湖水地方の西にありアイルランド海にのぞむイングランド北の小さなバラであったが、古い町の外側には炭鉱夫や港湾労働者が住み、アイルランド移民も少なくなかった<sup>(9)</sup>。1895年、1900年には保守党の候補者が議席を占め、1900年の保守党の得票率は63.9%に達していたが、1906年には自由党のバーンエート (W. J. D. Burnyeat) が20%近く得票率を伸ばし、55.8%をとって保守党候補ロバートソンウォーカー (J. Robertson-Walker) を下した。1910年1月には、労働党が立候補して保守党が漁夫の利を得たが、12月には、自由党と労働党の協力によって自由党が候補をたてず、労働党が議席を得た。

10位のウエストハム北も、ロンドンのすぐ西に位置する工業地帯の選挙区であった。隣接するウエストハム南より中産階級が多く住んでいたとはいえ、テムズ製鉄所の労働者や、石炭製造、化学産業の労働者、不安定な就労形態

の港湾労働者が集まっていた<sup>(10)</sup>。ウエストハム南選挙区は、1892年、後に労働党の創設者となるケア・ハーデーを送り出した選挙区として名を馳せたが、ウエストハム北は、保守党と自由党が議席を奪い合ってきた。1900年には保守党のグレイ (E. Gray) が61.5%をとって議席についたが、1906年には自由党政権でロイド・ジョージの社会改革の片腕となるマスターマン (C. F. G. Masterman) が57.3%を集めて議席を奪い、1910年の2度の選挙でも議席を堅持し続けた。

10位以下にも、労働者街か、労働者が増えつつあった選挙区が目立つ。17位のタワーハムレット・マイルエンドは、シティの東に位置する労働者地区であった。13位のセント・パンクラス南、18位のハックニー中央、19位のイスリントン東、24位のフラムは、本来中産階級の地区であったが、当時労働者が増加しつつあったとされている<sup>(11)</sup>。ロンドン以外でも、14位のランカシャーのストレトフォードや、15位のリーズ北は、もと中産階級の居住区であったが、当時労働者が流入しつつあった。21位のリバプール・エクスチェンジも、本来ビジネス街であるが、貧しい労働者やアイルランド移民が住み着くようになっていた<sup>(12)</sup>。一方バッキンガムシャーのウイコンビ (12位) は、なお圧倒的に中産階級の居住区ではあったが、椅子製造の工場があつて労働者も住み、サフォークのロウストフト (16位) にも印刷工場、鋳物工場の集まる町が含まれていた。またケントのトンブリッジ (20位) には、鉄道労働者が住む一角があり、ハンチントンシャーのラムゼイ (22位) にも、鉄道労働者とレンガ工の一群が住んでいた<sup>(13)</sup>。

もっともすべてが労働者の多い選挙区であったわけではない。5位に位置するサザーランドは、都市部の選挙区ではなく、スコットランドの北方の広大な地域を占める選挙区で、大地主であるスタッフォード侯爵が強い影響を保っていた<sup>(14)</sup>。1895年には自由党が議席を持っていたが、1900年に自由統一党のレヴェンソン・ガウワー (F. N. S. Leveson-Gower) が61.9%を得票して自由党から議席を奪った。そして1906年選挙では、自由党候補モートン (A. C. Morton) が59.7%と、21.6%も得票率を伸ばして保守党から議席を奪

い返し、1910年の2度の選挙でも、保守党と自由統一党の挑戦を跳ね除けた。

8位のイシュリトン北も、「上流中産階級」の居住区としてペリングによって分類されており<sup>(15)</sup>、1885年から一貫した保守党の議席で、1900年には保守党のバートレイ (G. C. T. Bartley) が65.5%を集めて議席を手にしていて、1906年には自由党のウオーターロウ (D. S. Waterlow) が、得票率54.5%で議席を自由党にもたらし、1910年1月には自由党ウオーターロウがかろうじて競り勝って議席を維持したものの、1910年12月には保守党にわずかに競り負けた。サリーのギルドフォード (23位)、リンカーンシャーのスレアフォード (25位) やチャートセイ (26位) は、農村の選挙区であった<sup>(16)</sup>。

こうした結果からみると、1906年に自由党が大幅に得票を伸ばし、議席をもぎとった選挙区は、労働者の選挙区だけだったわけではない。農村の選挙区でも、自由党の党勢の復活は時にめざましいものがあつた。とはいえ、自由党が大幅に得票率を伸ばした選挙区の上位に、労働者が多い選挙区や労働者が増えつつあつた選挙区が並んでいたことは明らかである。細かく紹介する余裕はないが、こうした選挙区では、1900年選挙に比べて1906年選挙では投票率が大きく上昇した。保守党の優勢が明確だった1900年総選挙で棄権していた有権者—おそらくは自由党支持の労働者—が、1906年選挙では積極的に投票所に足を運び、自由党の勝利に貢献したと想定することができる<sup>(17)</sup>。

### Ⅲ 自由党の参戦

次に1900年選挙と1906年選挙とで対決パターンが変化した選挙区の戦況を分析していくことにしよう。

まず1900年の保守党と労働党の対決から、1906年には保守党と自由党の対決へと変わった例外的な選挙区であるロンドンの労働者街の選挙区タワーハムレット、ボウ・アンド・ブロムレイの事例を取り上げよう<sup>(17)</sup>。この選挙区では、1900年選挙では保守党候補に対抗して労働党候補ランズベリー (George Lansbury) が立候補した。ランズベリーは、もともと労働者のリーダーで、19

1906年総選挙における自由党の選挙基盤

世紀末には自由党の活動家として選挙戦を取り仕切っていたが、1900年選挙では、労働党から立候補した。この選挙では自由党は候補をたてなかったが、ランズベリーは、保守党候補に大差をつけられて落選した。1906年選挙では、ランズベリーは別の選挙区に移り、タワーハムレット、ボウ・アンド・ブロムレイ選挙区には、自由党から新たな候補としてブルック（S. W. W. Brooke）が立った。労働党は1906年選挙では候補を立てなかった。選挙の結果、自由党のブルックが保守党候補を下して議席を手中に収めた。なお1910年1月には、ランズベリーが労働党候補として再びこの選挙区に帰ってきて、自由党、保守党候補と争い、三つ巴戦の末、自由党と労働党は共倒れし、保守党候補が議席を回復する。

表4が示すように、このタワーハムレット、ボウ・アンド・ブロムレイ選挙区においては、1906年選挙で自由党は1900年に労働党が獲得した得票率にさらに16.9%という大幅な得票を上積みして議席を獲得した。つまりこの選挙区では、1900年に労働党を支持した有権者は、1906年選挙では自由党候補を支持した。加えて1900年には労働党に票を投じなかった有権者も、1906年には自由党に大量の票を投じたと考えられる。

またランカシャーの紡績の町アシュトン・アンダー・ライン選挙区も、三つ巴戦から保守党と自由党の対決に変わった例外的な選挙区であった<sup>(18)</sup>。この選挙区では1900年選挙で保守党、自由党、労働党の三つ巴戦が行われた。しかし労働党候補ジョンストン（Johnston）はわずか737票（得票率11%）

表4 タワーハムレット選挙区の自由党・労働党得票率  
(1900年に保守党と労働党が対決し、1906年に保守党・自由党の対決となった選挙区)

選 挙 区	1900年 労働党得票率	1906年 自由党得票率	1906年の自由党得票率と1900年労働党得票率との差
Tower Hamlets Bow and Bromley	36.7%	53.6%	+16.9%

注 記

- (1) F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。
- (2) 網掛けは、議席を獲得した事を示す。

表5 アシュトン・アンダー・ライン選挙区の自由党・労働党得票率  
(1900年には三つ巴戦で、1906年に保守党・自由党との対決となった選挙区)

選 挙 区	1900年得票率		1906年自由党得票率
Ashton-Under-Lye	自 由 党	35.9%	56.3% (+20.4%)
	労 働 党	11.0%	

注 記

- (1) F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。  
 (2) (     ) 内は1906年の得票率の、1900年得票率からの増減を示す。  
 (3) 網掛けは、議席を獲得した事を示す。

しかとれず、自由党は35.9%をとったものの、保守党が議席を占めた。ところが1906年選挙では、労働党は立候補せず、自由党と保守党の一騎うちとなった。その結果、表5に示したように、1906年選挙では、自由党候補は1900年に労働党が得た票を吸収した上で、さらに10%近く票を積み増し、勝利を手にした。

つまりタワー・ハムレット、ボウ・アンド・プロムレイやアシュトン・アンダー・ラインのような1900年選挙で労働党が立候補していた選挙区では一この選挙区はいずれも労働者街であるが一1906年選挙で労働党候補が出馬せずに、保守陣営と自由党との一騎打ちに変わった場合、1900年選挙で労働党に投票した支持層は、ほぼそっくり自由党候補に投票し、さらに自由党は大きく支持を伸ばすことができたことが分かる。

#### IV 労働党の参戦

では、双方の選挙で保守党と労働党が対決し続けた選挙区や、自由党と労働党の三つ巴戦から保守党と労働党の対決となった選挙区、さらに自由党と保守党の対決から労働党と保守党の対決へと変化した選挙区では、有権者の投票行動はどのように変化したのであろうか。

まず1900年と1906年の双方の選挙で保守党と労働党が対決した選挙区を見



1906年総選挙における自由党の選挙基盤

てみよう。このカテゴリーにあてはまる選挙区は、マンチェスター南西とウエストハム南の2つの選挙区であった<sup>(19)</sup>。

表6が示すとおり、いずれの選挙区でも、1906年選挙では、労働党は20%を超す得票率の上昇を得て議席を獲得した。これらの選挙区での労働党の得票率の上昇は、自由党と保守党が続けて対決した選挙区での自由党の戦績と比べても全く遜色がない。このように政党の対決の構図に変化がなかった場合には、労働党は自由党と同じように、この選挙の最大の争点であった自由貿易を擁護する票を労働党に結集することに成功したと考えられる。

表6 1900年と1906年の双方の選挙で  
保守党と労働党が対決した選挙区の労働党得票率

選 挙 区	1900年労働党得票率	1906年自由党得票率
Manchester, South-west	37.4%	58.8% (+21.4%)
West Ham South	44.2%	67.2% (+23.0%)

注 記

- (1) F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。
- (2) 対象はイングランド、ウェールズ、スコットランドの1人区。
- (3) ( ) 内は1906年の得票率の、1900年得票率からの増減を示す。
- (4) 網掛けは、議席を獲得した事を示す。

表7 1900年には三つ巴戦、1906年には保守党と労働党が対決した  
選挙区の労働党得票率

選 挙 区	1900年得票率		1906年労働党得票率
Leeds, East	自 由 党	25.2%	66.1% (+46.0%)
	労 働 党	20.1%	

注 記

- (1) F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。
- (2) 対象はイングランド、ウェールズ、スコットランドの1人区。
- (3) ( ) 内は1906年の得票率の、1900年得票率からの増減を示す。
- (4) 網掛けは、議席を獲得した事を示す。

しかし表7が示すように、1900年選挙では自由・保守・労働党の三つ巴戦が行われ、1906年選挙で保守党と労働党の一騎打ちとなったリーズ東選挙区では、労働党はさらに驚くべき劇的な得票率の上昇を経験した<sup>(20)</sup>。リーズ東選挙区の場合、表が示すとおり、労働党は1906年選挙では実に46%も得票率を増やして、議席をもぎとった。労働党は、1900年に自由党が得た25.2%の得票率をすべて吸収し、さらに21%を超えるような大量の得票を上積みして集めたことになる。

一方1900年選挙では自由党と保守党ないし自由統一党との一騎打ちだった選挙区で、1906年に労働党が自由党にかわって出馬して一騎打ちを挑んだ選挙区は、表8に掲出した7つの選挙区であった<sup>(21)</sup>。

表から明らかなように、この7つの選挙区のうち、ダラムのバーナッドキャッスル選挙区を唯一の例外として、その他の選挙区では、1906年選挙で労働党候補は、1900年選挙での自由党候補に比べて、軒並み10%以上、平均15.1%

表8 1900年には自由党と保守党（自由統一党）が対決し、  
1906年には保守党と労働党が対決した選挙区の労働党得票率

選 挙 区	1900年 自由党得票率	1906年 労働党得票率	1900年の自由党と 1906年の労働党の 得票率の差
Birmingham, East	36.2%	47.4%	+11.2%
Liverpool, Kirkdale	28.6%	45.7%	+17.1%
Manchester, North-East	45.5%	64.6%	+19.1%
St.Helens	39.1%	56.6%	+17.5%
Durham, Barnard Castle	58.7%	58.8%	+ 0.1%
Lancashire, Gorton	47.6%	66.4%	+18.8%
Lancashire, Westhoughton	38.3%	60.2%	+21.9%
平 均	42.0%	57.1%	+15.1%

#### 注 記

- (1) F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。
- (2) 対象はイングランド、ウェールズ、スコットランドの1人区。
- (3) 網掛けは、議席を獲得した事を示す。

も得票を積み増した。労働党の得票率が最も上昇したのは、ランカシャーのウエストソートン選挙区で、ここでは実に20%を超える大幅な得票率の上昇がみられた。

ダラムのバーナードキャッスル選挙区では、1900年には自由党ピーズ（Pease）議員が当選したものの、議員が亡くなったため、1903年に7月に、自由党、労働党、保守党の三つ巴で補欠選挙が行われ、その結果労働党ヘンダーソン（Henderson）が1位で当選していた。つまりバーナードキャッスル選挙区では、1906年選挙の時点で、労働党議員が現職としてすでに議席についていたため、労働党が新たに立候補した他の選挙区とは事情がやや異なっていた。ただしバーナードキャッスル選挙区でも、労働党の得票の伸びは小さかったものの、労働党は議席を保持した。

労働党が得票を伸ばした結果、1900年選挙では、この7選挙区のうち自由党が議席をとれたのは、ダラムのバーナードキャッスル選挙区だけだったが、1906年選挙では、自由党に取って代わった労働党は、さらに4つの選挙区ーマンチェスター北東、セントヘレン、ランカシャーのゴートン、ランカシャーのウエストーノートンで、保守党候補を叩き落して議席を奪った。議席に届かなかったバーミンガム東とリバプールのカークデール選挙区でも、労働党は保守党にわずかの票数にまで詰め寄った。

## （2）保守・自由の対決から三つ巴戦へ

一方1900年に自由党と保守党・自由統一党の一騎打ちだったが、1906年には、自由党・労働党と保守陣営の三つ巴になった選挙区は、表9に示す10選挙区であった<sup>(22)</sup>。

表に示されているように、1900年選挙では、自由党はこの10選挙区のうち4選挙区で議席を制した。一方1906年選挙では、三つ巴の戦いの中で、自由党が6議席、労働党が1議席を奪った。だが10の選挙区の平均の得票率を計算すると、自由党と労働党の合計の得票率は、1906年選挙では平均64.9%に

表9 1900年には自由党と保守党（自由統一党）が対決し、  
1906年には三つ巴となった選挙区の自由党・労働党得票率

選 挙 区	1900年 自由党得票率	1906年 自由党得票率	1906年 労働党得票率	1906年 自由党＋労働 党合計得票率
Deptford	37.9%	52.2% (+14.3%)	6.1%	58.3% (+20.4%)
Dewsbury	60.8%	54.7% (-6.1%)	21.3%	76% (+15.2%)
Gravesend	41.5%	26.2% (-15.3%)	16.2%	42.4% (+0.9%)
Huddersfield	53.6%	38.2% (-15.4%)	35.2%	73.4% (+19.8%)
Leeds, South	51.2%	50.2% (-1.0%)	32.6%	82.8% (+31.6%)
Stock-on-Tees	48.1%	31.4% (-16.7%)	23.1%	54.5% (+6.4%)
Lancashire, Eccles	49.1%	38.8% (-10.3%)	26.4%	65.2% (+16.1%)
Monmouth District	45.8%	44.7% (-1.1%)	16.5%	61.2% (+15.4%)
Glasgow, Blackfriars Hutchensontown	43.2%	24.7% (-18.5%)	39.5%	64.2% (+21.0%)
Lanarkshire, Govan	50.7%	35.1% (-15.6%)	29.0%	64.1% (+13.0%)
平 均	49.3%	38.2% (-11.1%)	26.6%	64.9% (15.5%)

## 注 記

- (1) F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。  
(2) 対象はイングランド、ウェールズ、スコットランドの1人区。  
(3) ( ) 内は1906年の得票率の、1900年得票率からの増減を示す。  
(4) 網掛けは、議席を獲得した事を示す。

達し、1900年の自由党の得票率を15.5%も上回っていたことが分かる。その結果、自由党と労働党の得票の合計をみると、グレイブセンド選挙区を除いてその他の選挙区では、すべて過半数を上回っている。つまり自由党と労働

1906年総選挙における自由党の選挙基盤

党候補の票を単純に合計するならば、10議席のうち9議席をとれる可能性があったことになる。

しかし先にみたような自由党か労働党のいずれかに候補が絞られた選挙区とは違って、自由党と労働党の候補が別々に立候補したこうした選挙区では、反保守陣営の得票は、自由党と労働党に大きく分かれた。その結果、自由党の得票率は、労働党の得票率が著しく低いデプトフォードを例外として、その他の9選挙区では1900年に比べて低下してしまった。グレイブセンド、ハダスフィールド、ストック・オン・ティー、ランカシャーのゴバン選挙区では、自由党の得票率は15%以上も低下し、議席を保守党に奪われることとなった。ストック・オン・トレントでも、自由党と労働党が協力すれば取れる議席を保守党に許してしまっている。

一方グラスゴウのブラックフライアーでは、例外的に三つ巴の競い合いの中でも、労働党が競り勝って議席を獲得した。ここでは自由党は実に18.5%も得票率を落とし24.7%にとどまり、いきなり39.5%もの得票率を得た労働党候補のはるか後塵を拝することとなった。

逆に1900年には保守党と労働党が対決したが、1906年に三つ巴戦になった選挙区は、ブラッドフォード西選挙区であった<sup>(23)</sup>。表10が示すように、ブ

表10 1900年には保守党と労働党が対決し、  
1906年には三つ巴になった選挙区の自由党・労働党得票率

選挙区	1900年 労働党得票率	1906年得票率		1906年の 労働党自由党 合計得票
		自由党	労働党	
Bradford West	49.8%	28.2%	39.1% (-10.7%)	67.3% (+17.5%)

注 記

- (1) F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。
- (2) 対象はイングランド、ウェールズ、スコットランドの1人区。
- (3) ( ) 内は1906年の得票率の、1900年得票率からの増減を示す。
- (4) 網掛けは、議席を獲得した事を示す。

ラッドフォード西でも、自由党と労働党得票を合計すると、得票率は1900年に比べて17.5%も上昇した。だが労働党と自由党で票が割れたため、労働党はかろうじて議席を保ったものの、その得票率は10.7%も低下している。

このように、三つ巴戦から保守党と労働党の一騎打ちとなった選挙区では、労働党は46%という瞠目すべき得票率の増加を得たが、保守党と自由党の一騎打ちから保守党と労働党の一騎打ちになった選挙区でも、労働党は平均15%も得票率を上昇させた。しかし逆に保守党と自由党の対決から労働党が参戦して三つ巴になった場合には、自由党と労働党の合計得票率は大きく上昇したものの、自由党と労働党で票を食い合ったため、自由党の得票率は平均で11%も低下し、その結果議席を保守党に奪われただけではなく、自由党ではなく労働党の候補が三つ巴戦を制する選挙区すら現れたのであった。

## V 結びに代えて

1900年選挙と1906年選挙の双方で自由党と保守党が一騎打ちで対決した選挙区の得票を分析すると、1906年には、労働者街の選挙区や労働者が増えていた選挙区で、自由党が大きく得票を伸ばして保守党から議席を奪っていたことが分かる。伝統的な農村地域でも、自由党は競り合いを制したとはいえ、1906年における自由党の大勝利の要因の一つは、労働者の支持にあったと言わねばならない。1900年選挙と1906年選挙で対決パターンが変わった選挙区における票の移動からも、労働党と自由党の支持者が、保守陣営に対していかに強固な結束を示したが分かる。マンチェスターの労働者選挙区で保守党の元首相バルフォアが落選し、ロンドンの労働者街で社会改革を唱えるマスターマンが当選したことは、こうした流れを象徴していた。

しかし自由党の支持者と労働党の支持者の間に緊張が潜在しなかったわけではない。労働党候補がない場合、多数の労働者は確かに進んで自由党候補に投票した。また保守党と対決する場合、労働党は自由党の支持者からも支持を結集する力をもっていた。だが自由党に加えて労働党から候補者が立つ

た場合には、自由党と労働党の合計の得票率が大きく上昇しても、労働党と自由党に票が大きく割れ、その結果、自由党の足元が危うくなることが少なくなかった。

労働党の支持者と自由党の支持者は、保守陣営に対抗して結束していたが、両者の基盤は決してすっかり融合していたわけではなかった。独自の堅固な支持者を持つ労働党の台頭は、自由党にとって、潜在的な脅威であり、自由党にとっては、保守党に勝つためには、労働党の候補が票を割らず、労働者を自由党へ結集させる政策がますます必要となっていたと言わねばならない。1906年選挙で、自由党が掲げた、自由貿易を護持して「安いパン」を守る、という政策は、まさに労働者を自由党に結集させる結集軸を提供し、労働党との選挙協力は、労働者の票を自由党に引き付けるのに成功した。だがこの結束は、政治の舞台が転換し、選挙の争点が変われば必ずしも永続する保証はない。1906年の自由党の大勝利は、労働者の支持に依拠するものであった。だがそれゆえに、自由党はまた、足元の支持基盤に深い動揺を胚胎することになったのであった。

#### 注

- (1) 1906年選挙の選挙情勢全般については、A. K. Russel, *Liberal Landslide*, (London, 1973) を参照。本稿は、以下のようなこれまでの筆者のイギリス総選挙についての分析を前提としている。「近代イギリス選挙史研究序説—第三次選挙法改正後のイギリスの政治変動—」(『イギリス研究の動向と課題』、大阪外国語大学、1997年所収)、「アイルランド自治問題とイギリス政治の転換」(『グローバルヒストリーの構築と歴史記述の射程』、大阪外国語大学、1998年所収)、「19世紀末における自由党の衰退」(『国際社会への多面的アプローチ』、大阪外国語大学、2001年所収)、「自由党の衰退と反攻」(『英米研究』、大阪外国語大学英米学会、2004年所収)、「1906年総選挙と自由党の再生—20世紀初頭の補欠選挙と1906年総選挙における対決の構図—」(『英米研究』第30号、大阪外国語大学英米学会、2006年所収)、「1906年総選挙における自由党の再生と労働党—2人区の得票分析—」(『英米研究』第31号、大阪外国語大学英米学会、2007年所収)。なお紙幅の関係上、本稿では注記を最小限にとどめていることをあらかじめお断りしたい。

- (2) 選挙での勝敗に着目すると、選挙結果の別の側面を観察することができる。紙幅の関係から、詳細な分析は別の機会にゆずるが、議席数や得票率の増大が顕著であったロンドンやランカストリア以外でも、ウエセックスやヨークシャー、セントラルといった地域で、1906年選挙で自由党の勝率は大きく跳ね上がった。ウエセックスの場合、1900年選挙では、このカテゴリーの選挙区で自由党はすべて敗北した。これに対して、1906年選挙では8選挙区中6選挙区で自由党は議席をもぎとった。イーストアングリア、セントラル、デヴォン・コーンウォール、イングランド北部、ウェールズでも、1906年に自由党はこのカテゴリーで全勝している。仔細に観察すると、ウエセックスでは、得票率の上昇自体は、6.9%と平均以下であった。しかし自由党の得票率が51.3%と辛うじて50%を超したため、得票率は全地域中で最も低かったにもかかわらず、保守党に競り勝って多くの議席を手中にした。セントラルやヨークシャーでも同様に、得票率の上昇は平均以下であったが、競り勝って議席を確保した。つまり本文で取り上げたような得票率が著しく上昇した地域とともに、得票率の上昇自体は比較的小さかったものの、保守党とのつばぜり合いに競り勝って議席を伸ばした選挙区も少なからず存在した。こうしたマージナルな議席の勝敗は、その後の展開にとって重要な意味をもってくることになる。
- (3) Henry Pelling, *Social Geography of British Elections*, Cambridge, 1967, p.39
- (4) *ibid.*, p.36.
- (5) *ibid.*, p.244.
- (6) *ibid.*, p.51.
- (7) *ibid.*, p.66.
- (8) *ibid.*, p.66.
- (9) *ibid.*, p.330.
- (10) *ibid.*, p.64.
- (11) タワーハムレット・マイルエンドは、ロンドンの東の労働者街で、1904年まで、大きな醸造所を営み雇用を提供していたチャリントン (S. Charrington) が保守党議員を務めていた。セント・パンクラス南は、シテイの西に位置し、中産階級の居住区とともに、労働者の居住区が広がっていた。ハックニー中央は、シテイの北東にあたり、もともと中産階級の居住区だったが、次第に労働者の居住が広がって、20世紀初頭には労働者街に変貌していた。その西の隣接区イシュリントン東も、労働者が次第に増加する傾向にあった。フラムはロンドンの西に位置しているが、下層中産階級と労働者が住民の中心となっていた。 *Ibid.*, p.45, p.36, p.38, p.41.



- (12) ランカシャーのストレトフォードは、マンチェスターの南西に位置し、中産階級が主たる住民であったが、運河の開通とともに工業化が進み始めていた。リーズ北はもともとこの工業都市の中でも中産階級の居住区であったが20世紀初頭には労働者階級の住居も作られるようになっていた。リバプールのエクステンジは港に近い中心街であった。 *Ibid.*, p.245, p.293.
- (13) バッキンガムシャーのウィコンビ（12位）は、オックスフォードとロンドンの間の農村であるが、椅子製造の工場があった点で周辺の選挙区とは異なっていた。サフォークのロウストフト（16位）はナレッジ東南にある港町であるが、選挙区内には印刷工場、鋳物工場の集まる町バククル（Beccles）があった。ケントのトンブリッジ（20位）は中産階級の居住区であったが、鉄道労働者住む一角があり、ハンチントンシャーのラムゼイ（22位）も、北東の都市ピータバラの郊外には鉄道労働者とレンガ工が住んでいた。 *Ibid.*, p.74, p.100, pp.70-71, p.97.
- (14) *ibid.*, p.384.
- (15) *ibid.*, p.38.
- (16) *ibid.*, p.74, pp.225-226, p.70.
- (17) ちなみにランバスケニントンの投票率は、1900年には62.3%、1906年には74.1%であった。センタパンクラス西の投票率は1900年には64.2%、1906年には79.3%であった。これに対して例えばデヴォンのトーキーの得票率は、1900年には84.9%、1906年に89.5%であった。
- (18) タワーハムレット、ボウ・アンド・ボロムレイについてはHenry, Pelling, *op.cit.*, p.47、アシュトン・アンダー・ラインについては *ibid.*, p.256を参照。
- (19) マンチェスター南西とウエストハム南については *ibid.*, pp.244-245, p.64. を参照。
- (20) リーズ東選挙区については *ibid.*, pp.294-294. を参照。
- (21) バーミンガム東、リバプールのカークデール、マンチェスター北東、セントヘレン、ダラムのバーナッドキャッスル、ランカシャーのゴートン、ランカシャーのウエストホーントンについてはそれぞれ、 *ibid.*, p.182, p.249, p.243, p.265, p.337, p.246, pp.268-269を参照。
- (22) デプトフォード、デューズベリー、グレイズセンド、ハダスフィールド、リーズ南、ストック・オン・テーズ、ランカシャー・エククルス、モンマス、グラスゴー・ブラックフライアー、ラナークシャー・ゴヴァンについては、それぞれ *ibid.*, p.39, p.300, p.79, p.301, p.292, p.329, p.267, p.354, p.401, p.407を参照。
- (23) ブラッドフォード西については *ibid.*, p.299.